書評

原色図鑑－外来害虫と移入天敵－

梅谷献二／編

ヒマラヤの巨大な山塊に抱かれたネパールの首都カトマンズは，奄美大島とほぼ同緯度にありながら，気候的には四国や九州と大差なく，温帯域にあると考えてよい。夏は涼しいが，厳寒期には氷点下になる日もあらわれる。

カトマンズにはかつて，足かけ3年にわたり住んでいた。この近辺の生物相は，基本的に温帯要素で構成されるが，多聞にもれず，熱帯要素が徐々にしみ込みつつある。例えば日本では琉球列島を分布北限とする昆虫が，氷河の消失に呼応するかのように，カトマンズで増加傾向にある。ヒマラヤ南麓には，インド亜大陸へつづく亜熱帯平原が拡がる。熱帯起源の生物が，この平原から物資とともにカトマンズに運ばれるのは茶飯事だろうし，陸続きの恩恵がある以上，動物が自力で斜面を登攀するのに，さほどの困難はないであろう。

いっぽう，日本は四面，海に囲まれている。この地理的条件に加え，三世紀に及んだ江戸期の鎖国策は（日本人の世界観を著しく偏狭なものにしてしまったが）外来生物の侵入阻止には大きく寄与したと考えられる。当時，南蛮船や中国船にまぎれて来日した生物は，ものの数ではなかったろうし，自力で海を渡って来る生物があったにせよ，熱帯系の生物が簡単に定着できるほど温暖化してはいなかった。

近世における急速な近代化，都市化，温暖化は在来の生態系をひどく衰退させた反面，外来生物は年々その数を増しつづけている。外来種の過半数が，何らかの害悪をもたらす密航者であると本書も警告する。運輸・交通手段が利便化するほど，いよいよ「招かれざる客」の来日に歯止めをかけづらくならざるをえない。

日本列島に侵入し，勢力を拡げている外来種については，従来，さまざまなかたちで報告されてきたものの，ことに昆虫種を包括的にまとめた文献は見当たらない。「原色図鑑　外来害虫と移入天敵」は，20名におよぶ専門家の知嚢を結集し，遂に上梓された好著である。外来種の数多さもさることながら，各種について形態や生態が詳述され，侵入経路の入念な考察とカラー図版も適切に添えられているから，いざというとき即座に必要な情報を得ることができる。

また，概説やコラムを通じ，外来種のもたらす具体的な影響や対策など，蘊蓄が惜しみなく披露されているので，関連分野を問わず，環境保全に関心をもたれ，あるいは環境教育に携わられているかたがたにも，ぜひ，一読をお奨めしたい。同出版社刊，「日本原色帰化植物図鑑」（全2巻）とあわせて参照されることにより，日本が「外来種列島」へ変貌しつつある危機的現状を，絵空事ではないと容易に理解できよう。蚊に刺されてデング熱やマラリアに感染してしまう日本の姿も，なにしろSFの世界と笑い飛ばせなくなったご時世を迎えたのである。

（安永智秀：Research Associate, American Museum of Natural History, New York）

A5判 408頁 上製本 定価10,290円（税込）
発行：全国農村教育協会（hon@zennokyo.co.jp）